
白き鬼神と蒼穹の引き手(仮)

シノン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白き鬼神と蒼穹の引き手（仮）

【Nコード】

N6916Y

【作者名】

シノン

【あらすじ】

遺伝子の異常変化により凶暴な存在と化した生き物たち。【災禍】と呼ばれるその恐怖を相手に、人類は生き残ることが出来るのか。現代より少し先の未来の話。主人公が異形の化け物相手に戦うお話です。

素人なので優しい目で見てくれるとうれしいです。

主人公が戦ったり、突っ込んだり、あきれたり、泣いたり、笑ったり。

スピード重視のお気楽小説、開幕！

プロローグ 世界観（前書き）

初投稿です。素人なので生暖かい目で見守ってくれればいいです。

プロローグ 世界観

時は現代。

人類は未知の恐怖におびえていた。

【災禍】《カラミティ》という存在が明らかにされたのは今からおよそ二十年前。

地球上の生物の遺伝子が異常変化することによって生まれた異形の化け物たち。

銃弾を弾き、非常に強い耐火性を持つ彼らは、人類全体の共通の敵となっていた。この脅威に対し、各国は即座に対策を施し始める。

その結果、【災禍】にも弱点が存在することが分かった。

彼らの外殻は刃に弱かった。簡単に切り裂けるというほどではないが、足止め程度にしかならない銃弾や火炎放射器に比べれば幾分かマシなのは確かであった。この点、日本は他国より恵まれていたといえる。日本には昔から刀という斬ることに特化した武器があったからだ。

【災禍】の外殻は点の衝撃に非常に強いことが確認されているため、槍や弓などの貫く武器ではなく、大剣や刀、もしくはハンマーなどの武器で戦うことが、常識として確立されていた。

また、【災禍】が世間に認識されるのとはほぼ同時期に、特殊な力に目覚める人間が確認されている。これは【災禍】という天敵に対する、人類という種族の防衛機構のようなものではないかと考えられている。その超能力とでもいうべきものを身につけた者たちは、体に『霊頸』と呼ばれる新たな機関を持っているため、進化した人類ではないかと考える学者も多い。

彼らもまた、【災禍】への対抗策として、戦うことになる。各国は非常に強い戦力である彼らを、教育機関をつくり管理することを決定。生まれた子供はすべて病院で『靈頸』の有無を調査され、十四歳になると同時にその教育機関に移される。

これは、彼らの戦いの物語だ。

七年前。

とある【災禍】が日本の山間の町を襲った。人口三百四十二人の小さな町はわずか二時間でほとんどの人間が死に絶えた。

第特級【災禍】、アラバスタ。大鷲が異常進化した【災禍】である。巨体に似合わぬ異常な機動力と、【災禍】の特徴ともいえる堅固な外殻。それは世界中の政府を悩ませるもっとも厄介な【災禍】だ。空を飛ぶ敵に斬りかかることなどできず、銃弾はあっけなくはじかれる。戦闘機が近距離で放ったミサイルすら易々とかわされ、体当たりを食らってバランスを崩し、海に墜落した。アメリカが三十基の戦闘機で出撃したが、遭遇の一時後に全滅させられている。小さな町に対抗策などあるはずもなかった。

日本政府が連絡を受けて現場に着いたときは、そこには廃墟と食い散らかされた元人間が転がっているだけだった。生き残りは四人。彼らの証言で町を襲ったのはアラバスタであることが確認された。四人は政府によって保護され、三人が元の生活に戻っていた。そこに至るまでに絶大な苦労があったことを、念のため書き記しておく。

残った一人は『靈頸』持ちだった。七歳の少年は国の施設で暮らし、【災禍】の知識を貪欲に吸収していった。彼が『力』の使い方を理

解したのは八歳の時。超感覚 と名付けたその『力』と、十歳の時より始めた戦闘訓練。少年が選んだ武器は、槍。【災禍】に対して不利であるとして、施設の職員は口をそろえて反対したが、少年は自分が選んだ武器を決して変えようとはしなかった。

少年は年に似合わぬ物静かな少年に育っていった。朝早く起きて黙々と槍を振るう少年。昼間は【災禍】に対する知識を勉強し、夕方になると槍の訓練や走り込みを行う。

施設に入ってから六年。

入学の時間が近づいてきていた。

「……いよいよ君ともお別れだね、悠里君。」

施設の入り口に立って感慨深そうに眼鏡を持ち上げる男性。優しい風貌の中に、隠しきれない別れの寂しさがあった。その目が写すのは、細く引き締まった体をした十四歳の少年。右手には槍が握られている。日本人らしい黒髪と、深さを湛えた黒い瞳。

「……………七年間もありがとうございました、須藤先生。」

言って、少年は深々とお辞儀をした。それを見た須藤と呼ばれた男性は苦笑する。

会ったばかりのことを思い出したのだ。

顔を上げた少年も隠し切れない笑みを浮かべていた。心を開いたものにはしか見せない、優しく悲しい微笑。

「僕から言えることは一つだけさ、悠里君。」

須藤はまた眼鏡の位置を直しながら言う。おそらくはそんなことを考えたこともない、少年へのアドバイスだ。

怪訝な顔をした少年に、須藤は優しい笑みを浮かべ言う。

「死なずに、帰っておいで。君の家はここなんだ。」

後ろに並んでいた職員たちが一斉に頷く。

それを見た少年は驚くように周囲を見る。職員総出で見送りに来ていたのだ。

腕組みをしてしきりにうなづく男性職員。

ハンカチで目元をぬぐいながら笑う女性職員。

恰幅のいい体をいっぱいに揺らして手を振る食堂のコック。

「……………みなさん、七年間本当にありがとうございました!!」

少年は目元から溢れ出しそうになる涙をこらえながら、施設に別れを告げた。

【災禍】と戦ったための、更なる力をつけるために。

ブローグ 世界観（後書き）

誤字脱字、感想やアドバイスなど、ありましたらお願いします。

第一話 始まりと邂逅

ただ学園と称される教育機関。

その戦闘技館 体育館より頑丈な施設 に八十二名の新入生が並んでいる。

一般の学校と違うことは、三割ほどの生徒が何らかの形で武装していることだろう。周囲の生徒が緊張でその身を固くする中、明らかに空気が違う二人がいた。

右手に槍を携え、目を閉じている少年と、弓を支えに眠りこける白髪の少女だ。見る者が見れば、少女の周囲に青い靄のようなものがたなびいているのが見えるだろう。

「今年はすごいのが入ってきたね。」

車椅子に腰かけた老齢の女性が、しみじみと言う。その両目は紫色に輝いており、見定めるように新入生を見回している。

スキル 鑑定眼。目に写した対象の情報を、大まかにだが知ることのできるスキルである。

「確かにあの二人はほかの生徒とは一線を画していますね。」

もつとも、少年と少女がほかの生徒よりも強いであろうことなど、ある程度の修羅場をくぐってきたものが見れば一目瞭然だが。

（スキル 超感覚 …… 記憶力、思考力、聴力、視力の強化ですか。少女は、スキル 霊姫 …… おや？ 私の 鑑定眼 でも見れませんか。相当ランクの高いスキルのようにですね。）

だがおそらく弓で戦うことによる何らかのメリットがあるスキルなのだろう。そうでなければ、【災禍】への有効打にはなりにくい弓を使う理由が見つからない。

槍もそうである。だが槍は弓と違って前例がある。かつて、槍を使って【災禍】と渡り合っていた女性がいたのだ。日本最強と言っても過言ではない、『神槍』と呼ばれた女性が。

（問題は彼が『神槍』の域までたどり着けるかどうかですか……いいえ、たどり着かせるための学園ですね。）

「よく来た、新人生の諸君。これより入学式を始める。」

淡々とした声を聴いて、老婆は思考の海から現実へと意識を引き戻す。槍を持った少年は目を開き、少女は眠そうな視線を壇上の男に向けた。

「これからのことを簡単に説明する。自分がどんなスキルを持っているかわからないものは、玉響教授に『視て』もらうように。」
玉響教授の名前が出たタイミングで、老婆は車椅子でゆっくりと前へ出てお辞儀をする。柔和な笑みを浮かべたまま、ゆっくりと後ろへと下がった。

「ここに来る前に何らかの形で戦闘訓練を行っているものは、戦闘科に行つて自分の名前を登録してもらえ。本格的な授業は明日からだ。各々、武器を揃えるなり、班を組むなり、明日に備えてくれ。ああ、あと班は基本的に四人編成だから、五人以上で組むことは認められていない。以上だ。」

話が終わったと判断した人間がチラホラと動き始める。

教師たちが注目している二人も、ゆっくりと戦闘科の建物に歩いて行った。

「指揮官と前衛、武器は槍で登録お願いします。」
「お名前とクラスをどうぞ。」

「1Aの葛城悠里です。」

戦闘科の建物は非常に無骨だった。一見すると普通の事務室に見えるが、傘たてのようなものに、剥き身の剣がいくつも刺さっている。そこに三十八人の新入生が集まっていた。

そのうちの一人である葛城悠里は、滞りなく登録を終えた……はずだった。

「葛城悠里さんですね？ 少々お待ちください。……こちらが班申請の紙になります。」

「へ？ いや俺はまだ班は……」

悠里がここに出向いたのは単純に自分を戦闘科に登録するためである。班を組むためではない。そもそもこの学園に入学したての自分に、どうやって班を組めというのだろうか。

「今回の入学者は八十二名です、四で割ると二余ってしまいます。ならば、成績上位者同士で組んでもらい、できるだけ戦力差を均等にしようという上の考えです。」

よく見ると、すでに名前が書いてあった。葛城悠里の下に、鳳院雪那という名前が既に書かれている。

悠里は、入学時の試験で満点を取ったことを思い出した。

「すでに鳳院雪那さんのサインは頂いているので、あとは葛城さんがサインしていただければ、登録は完了となります。ちなみに拒否権はないのであしからず。」

につこりとほほ笑む栗毛の受付嬢に、思わずため息をつきかける。悠里はかろうじてそれを堪えると、班申請の紙にサインするのだった。

翌日。

朝早く起きた悠里は愛用の槍を持って外に出た。昨日のうちに確認しておいた訓練場へと向かう。

訓練場では、上級生と思しき人たちが剣や刀を振るっていた。その邪魔にならないように端の方へよると、悠里は槍を振るい始める。ただ無心に槍を振るう。もちろん周囲の状況を探ることも忘れない。珍しい槍という武器を振るう悠里に最初は注目が集まっていたが、やがてみな自分の訓練に戻っていった。

突く、薙ぎ払う、振り回す。仮想敵の攻撃をかわし、受け止め、槍ではじく。

重い鉄製の槍を振り回しているのに、悠里の態勢は崩れない。

実はこれには秘密がある。

前述したとおり、スキルと呼ばれる力に目覚めた者たちには『靈頸』と呼ばれる器官を持つ。いまだに原理は不明だが、『靈頸』はエネルギーを生み出す。このエネルギーは『靈力』とよばれ、彼らはこの力を使い無意識に身体能力を上げているのだ。また、『靈力』は武器に纏わせたり、『靈術』として使うことが出来る。もっとも靈術は発動するのにそれなりの時間がかかるため、戦闘に使う者はまずくない。

一通り槍を振り終わった悠里は、まだ訓練している上級生を尻目に訓練場を後にした。

ゆっくりと廊下を歩いて、1Aの教室に向かう。今が七時過ぎで、最初のHRが始まるのが七時半のため、余裕で間に合う計算となる。その途中だった。

「……………何してんだ？」

学校の廊下で行き倒れてる人間と出会ったのは。

第二話 決闘ともう一人（前書き）

このペースで行けるといい、なあ。

第二話 決闘ともう一人

「……………寝ている。」

「そういうことじゃねえっ!!」

悠里は思わず声を大にして突っ込んでしまった。床に横たわった少女は、ゆっくりとその身を起こした。背中の中ほどまで垂れていた白髪が光を反射して揺れる。眠たげに眼をこする少女はポケっとした黒い瞳で悠里を見つめている。

「質問を変えよう。どうしてここで寝てたんだ。」

「……………眠かったから。」

「自分の部屋で寝ろよ。」

ポクポクポクチーン。

なるほどといった様子で手を叩く少女に、悠里は関わり合いになるのをやめようと判断した。しかしそうも言っていられなくなった。

「……………ここで会ったのも何かの縁。私は鳳院雪那。よろしく。」

少女はそう言っ弓を握りしめた右手を差し出す。

対する悠里は、どこかで聞き覚えのあるその名前を、どこで聞いたのか思い出そうとしていた。

ほーいんせつな。ほういんせつな。鳳院雪那。

「お前が俺のパートナーか……………。よろしく、鳳院雪那。俺の名前は葛城悠里だ。」

全てを諦めたかのようにため息をついた悠里は、差し出された右手を見やる。その右手はいまだにがっちり弓を握りしめており。

「……………パートナー。握手。」
「出来るわけないのを見てわかれ!!」

普段は冷静な悠里は、この鳳院雪那という少女のペースに飲み込まれていた。

朝のHRが始まった。

一クラス四十一人で構成されたクラスで、やはりというか悠里と雪那は浮いていた。

その二人の席は隣同士である。おそらく学園側が取り計らってくれたのだろう。で、悠里の隣で雪那が何をしているのかというと。

寝ている。

より正確に言うと爆睡している。

教師も特に注意する気はないのか、てきぱきと連絡事項を伝えていく。もつとも教師が説明している連絡事項は、あらかじめ設けている説明会をきちんと覚えていれば全く問題はないのだが。

悠里は腕組みをして不機嫌そうな空気を周囲にふりまいている。なぜならこの爆睡女が説明会の時に起きていたとは考えづらく、結局自分が全部説明することになるのを理解しているからだ。

十分後、まさにその通りになった。

一時間目の授業は、簡単な【災禍】の見分け方の授業だった。目の前の【災禍】の強さが分からないことは、ほとんどが死につながるので生徒は必死に授業を聴いていた。

二人を除いて。

雪那は相変わらず爆睡しており、悠里も興味がないと言いたげに窓の外を見ていた。そのとき窓のそとでは上級生が戦闘訓練を行っており、それを見て参考になるような上級生を探していたのである。

（あの大剣使い動きがいいな……。いや、あれは防御用のスキルを使っているのか。）

そんな二人に教師が業を煮やした。

「葛城、第特級【災禍】を四体あげてみなさい。」

「アラバスタ、バズット、ゲヘナ、ホーホーホー。」

悠里は教師の方を一瞥もせず即答した。その目はまだ校庭で大剣を振るう上級生から離れない。

「鳳院、それぞれの特徴を言ってみなさい。」

「……………大鷲の異常進化型。空中からの奇襲に注意。ヒゲマの異常進化型。見かけに似合わず速い。元が分かってない【災禍】。発見報告もほばない。海蛇の異常進化型。音で敵を惑わせる。」
雪那はドサツと力尽きたように机に突っ伏すと、そのまま寝息を立て始めた。

悠里は何事もなかったかのように外を見続けている。そんなことを繰り返している間に一時間目は終わったのだった。

二時限目は霊術の使い方の授業だった。

戦闘で使いづらいといっても、時間をかければ威力の底上げや機動

力の強化などが出来るため、覚えておいて損はない。靈頸によって生み出されたエネルギー、靈力を、『式』と呼ばれる回路に流すことで任意の事象を起こす。この方法が確立されたのはごく最近である。それまでは靈力を特定の部位に集中させることで、筋力の強化などを行っていた。

しかしこの方法は効率が悪く、せいぜい二、三分しか持たなかったのだ。

靈力を『式』に織り込むことで、より効率よく身体強化などを行うことが出来る。この発見は式を発明した人間とともに、大喜びで世界に受け入れられた。しかしその人間の詳細な情報は伏せられている。

一時間目を全くとっていいほど聞いていなかった二人も、この授業は最後まで真面目に聞いていた。

三時限目と四時限目は戦闘訓練。

この戦闘訓練こそが、学園の真髄と言えるだろう。座学や靈術の授業などはあくまでおまけに過ぎない。

周囲を高い石壁に囲まれた学園の校庭では、八十二名の人間が集まっていた。ようやく暖かくなってきた日差しを浴びながら、校庭を走り続ける生徒たち。

十周を越えたあたりで、数人の生徒たちがリタイアした。

二十周を越えたあたりで、半分の生徒たちがリタイアした。

三十周を越えて、走っている人間は十数人になった。その十数人は入学式に武器を持参した者たちである。彼らは自らの武器を構えたまま走り続けている。悠里と雪那は涼しい顔をして走っていた。

四十周を越えたところで、教師がストップをかけた。十分間の休憩である。わずかに息が上がっているだけの生徒たちは、リタイアした生徒たちの羨望とやっかみの視線を受けながら、腰を下ろした。悠里も休むことの重要さを知っているので、その場に腰を下ろす。すると、普段の眠そうな瞳を鋭くとがらせた雪那が近づいてきた。

「決闘だ、葛城悠里！！」

やる気溢れる声で叫んだ雪那を、校庭にいた人間全員が呆然と見つめる。

.....どちら様で？

第二話 決闘ともう一人（後書き）

誤字脱字、アドバイスや感想などありましたらお願いします。

第三話 決闘の結末（前書き）

投下ッ！！

第三話 決闘の結末

「……………とりあえず理由を聞かせてくれ。」

周囲があまりの衝撃に凍り付くなか、なんとか平静を取り戻した悠里が問いかける。

暖かな春の校庭に、少女の言葉を待つ八十一人の生徒……………シュー
ルな光景だ。

「簡単なことだ。貴様が本当に私のパートナー足り得るのか……………
証明してもらおう。」

「あなたは本当に鳳院雪那さんですか？」

思わず敬語になってしまった悠里の問いかけは届かなかったようだ。
ざわつく周囲を見かねた教師がようやく話に割り込んでくる。その
まま悠里と男性教師でひそひそ話開始。

「悪いね、葛城君……………彼女はすごい二重人格の戦闘狂なんだよ。」

「だから諦めて戦えっていうんですか。」

「う、まあ……………安全措置はとるから大丈夫、だと思っ。」

「……………なんで今一瞬詰まったんですか。」

「いや、彼女ね、スキルの暴走で家屋が半壊したって噂が……………」

「……………やればいいんですね？ 負けてもいいですよね。」

「それはもちろん！」

いい笑顔だった。対する悠里は重くため息をつく。

自分が組んだパートナーは、非常に面倒くさそうなやつだと思いな
から。

「準備はいいな。」

「目前二メートルぐらいまで近寄ってからお願いします。」

「戯言をほざくな。」

悠里は腰だめに槍を構え　　といつても安全のため穂先は丸い

、雪那も矢を弓につがえた。こちらの矢の先も潰されている。

二人の距離はおよそ十七メートルである。なぜこんな中途半端な数字になったかというと、二十メートルでやろうとした雪那に悠里が
ごねてごねてごねまくったからだ。

出来るだけ有利な戦場で、が悠里のモットーなので無理もないかもしれない。

両者の間に緊張感が満ちる。悠里は槍を構え前を見据え、敵のわずかな拳動も見逃さまいとしている。

「では、行くぞ？」

ピイイイイイイ！！

青空に開始のホイッスルが響き渡った瞬間、悠里が素早く身をかがめて地面を蹴る。

ツヒュンッ！！

雪那が放った矢は、一瞬前まで悠里の胸があつた場所を突き抜ける。そのスピードは、明らかに異常だった。女性……………それもまだ年若い少女が出せる矢のスピードではない。

（スキル……？ いや、あれは違うな……霊術か。）

雪那はあらかじめ、矢に式を刻んでいた。その効果は空気抵抗の減少、スピードも上がるというものである。

雪那は一本目が外れたことにも動揺せず、素早く二本目の矢を構えた。

（スキル 超感覚 起動！！）

手加減をして勝てる相手ではない。お互いの実力を測るというならいい機会だ、こちらもできる範囲で全力で行かせてもらう。悠里は自分のスキルを起動すると目を見開いた。

超感覚 により上昇した動体視力は、矢じりを掴む少女の右手の動きを止まっているように見せる。その指が離された瞬間、右手に握りしめた槍を振り上げる。まるで世界を置き去りにして自分だけが動いているような感覚。

（もつと先がある……！！）

振りあげた槍は、狙い過たず矢を払いのけた。

カンツと軽い音が響き、あさつての方向にすっ飛んで行く矢。それを一瞥すると、悠里は距離を詰めるべく地面を蹴った。

残り十二メートル。

動揺しつつも冷静に、雪那は距離を取る。まさか槍で防がれるとは思っていなかったのか、その顔は非常に悔しそうだ。

そのくちびるが、動く。普通ならば聞き取れないほどの声量で呟いたのだろうが、超感覚 によつて聴力が上昇している悠里にはかろうじて聞き取れた。

「集え蒼き霊たちよ、汝らが友が命ずる

」

ぞくつ、と悠里の背中に寒気が走る。

本能と体全体が訴えかける、『全力でかわせ』と。

強化された目に映るのは、雪那の手元で青白く輝く一本の矢。その矢にどれだけのエネルギーが秘められているのか
そんなことを考える悠里の耳に、雪那の弦き声が届いた。

「我が敵を殺せ。」

雪那の指が開かれる。それを見た瞬間、一も二もなく、悠里は全力で横に跳んでいた。

雪那の指から放たれた光芒は、悠里の横を通り過ぎると校庭に突き刺さる。

「これは……食らったら死ぬんじゃない……」

校庭に突き刺さった矢は一本だが、その周囲に四つの穴が開いていた。撃った矢は一本。穴は五つ。

霊力によって編まれた不可視の矢。それが今の技の正体だ。

「よくかわした、が。次は十本だ。」

「何本まであるんだ!？」

「安心しろ、百はない。」

「出来るかつ!!」

軽口をたたきながら悠里は地面を蹴る。

確かに不可視の矢は脅威だが、雪那は悠里の前に手の内を晒し過ぎた。

（超感覚 派生スキル解放、 並列思考 !）

派生スキル。

これは最近その詳細が明らかにされたものだ。身体強化などのスキルを使って、体の特定部分を強化すると、たまに新たなスキルが目覚めることがある。

たとえば筋力上昇のスキルを使い続けると、**堅牢** という新たな派生スキルが発生することがあることが確認されている。

悠里が使う **超感覚** はその点、派生スキルの宝庫である。

思考力を上昇させれば **並列思考** に。

視力を上昇させれば **鷹の目** に。

だが、派生スキルは持ち主に負担を強いる。発動中はその部位に痛みが走るし、同時に多種のスキルを使うと、元の自分の体との差異に、感覚が狂っていくとされている。

悠里は自分が持つ派生スキルを全て解放したことは一度もないから、それをしたらどうなるかはわからないが、碌なことにはならないであろうことはわかっていた。

（つぐ………！）

派生スキル **並列思考** の発動に伴い、頭痛が悠里を襲う。同時に二つのパターンを考えられるようになった頭で、雪那の姿勢の意味を判断する。どこを狙っているのか、どのタイミングで撃つのか、

並列思考 と強化された記憶力と視力で見極める。

本人も気づいていない、無意識の呼吸のタイミングすら記憶し、攻撃をかわす。

連続で放たれる矢の全てを、雪那が撃つ前にかわしきる。

「嘘………だらう………？」

「嘘だと思っなら好きにしろ……………」
距離を詰め切って、雪那の細い首筋に槍の穂先を当てた直後、悠里は意識を失った。

第四話 夢に見たモノ（前書き）

厨二病全開です、いつもですが。
……反省は、していません。

第四話 夢に見たモノ

『 目覚めたか、天衣無縫。 』

(……は……？)

目が覚めたとき、悠里が見たのは一面に広がる雪景色。どこまでも純白。
一切の穢れを知らない、限りなく澄み切った白。平坦に広がるその大地に、悠里は横たわっていたのだった。

『ここはお前の精神世界。私は故あってお前の中に潜む人ならざる者。』

突風が吹いた。突風は地面の雪を巻き上げ、その場に形を作っていない。

呆然とそれを見る悠里。自分がなぜこんなところにいるのかも、まだ全く分かっていないのだ。

『私はお前たちがスキルと呼ぶものの正体だ。人の身に潜み、寄生し、代わりに力を与える。』

集まった雪が、一人の女性の姿になった。それは悠里の記憶に焦げ付いた女性の姿。

槍を握り、凛々しく【災禍】を睨み付けるその雄姿。

そこには、かつて『神槍』と呼ばれた女性が立っていた。

「……………母、さん？」

『お前の記憶から、お前がもっとも安心できる姿を取らせてもらった。』

瞬間、悠里の胸の中にたとえようのない怒りが吹き荒れた。それは自分が慕うものを汚された恨み。

自分の中の偶像を侵略されたが故の、抑えようのない憎しみだった。

「貴様！」

立ち上がり、手をかざす。足元の雪が巻き上がり、愛用の槍を形作る。

『そうだ、ここはお前の精神世界。お前が望むものは何でも作れる。もっとも、それを本能で理解できる人間なぞそうはいないが。』

言いながら、母の形を持った何かは、悠里と同じように手をかざした。

雪が巻き起こり、吹雪の壁となる。あまりの豪風に悠里は近づくこともできない。

『もちろん、お前に寄生する私も同じことが出来る。』

「その姿とその声で……………喋るなあああ！！」

超感覚 起動。

強化された視力は吹雪の薄いところを見破る。

同じように雪を巻き上げ、雪玉を作るとそこに放り込んだ。放り込まれた質量に風の計算が乱れ、吹雪の勢いが弱まる。その隙を逃さず、悠里は振りかぶった槍を振り下ろした。

ギンッ。

金属的な音を響かせて、悠里の槍は、相手が持つ槍にはじかれた。

『天衣無縫。お前とゆつくりと話せないのは残念だが……理性ある会話は望めないようだ。出直すしよう。』

悠里の体は、相手が投げ放った槍に貫かれた。

急速に悠里の意識が薄れていく。

『次会うときは……スキル 天衣無縫 を。お前に託そう。』

薄れていく意識の中で最後に悠里が聞いたのは、そんな言葉だった。

「ここは………？」

「目が覚めましたか、葛城悠里君。」

目を開けると、モスグリーンの天井が目に入った。どうやら医務室のベッドに横たわっているようだ。

声が聞こえた方向に顔を向けると、優しげに笑う老婆と目があつた。

「あ………玉響教授………」

「入学式以来ですね、葛城君。」

「………どうして医務室に？」

思い出した。

決闘を挑んできた鳳院雪那の首筋に、槍を突き付けたところで、派生スキルの反動で意識を失ったのだ。

それより、なぜ玉響教授がここにいるのかだ。

彼女は 鑑定眼 をもつ学園の希少な人材である。一生徒 し
かも新入生 を見舞うような人物ではないはずだ。

「いえ、あなたは鳳院雪那さんと戦ったのでしょうか？ 彼女のスキルは私の 鑑定眼 でも見れなかったので、興味本位です。」

「はあ。」

医務室に何とも言えない沈黙が流れた。

玉響教授は次の言葉を待つように悠里を見つめ、悠里は何を言えばいいのかわからないので押し黙る。

強かったですよ？ かるうじて勝てました？

いや、なんか違う気がするなあ…………。

なやむ悠里に、玉響教授が助け船を出した。

「彼女のスキル名は 霊姫 。もしよければあなたの考えを聞かせて欲しいのですが…………。」

「あ、ああ、そういうことですか。しかし、俺なんかの意見を聞いても…………。」

「超感覚 。あなたのスキルで感じ取れた何らかの情報があるはずです。戦闘中に感じ取れた情報は重要ですよ。」

まったく言うとおりなので反論できない。

「…………おそらく霊術使用の補助の役割のスキルではないかと。あと、

有機物に靈力を纏わせることで、その威力を底上げしています。」「有機物？……物体ではない理由を聞かせてもらえるかしら。」「物体であれば速射の利点がある銃を使うでしょう。けれど弓を使うということは、おそらく。」

この判断の理由には、戦闘中に聞いた雪那の言葉も絡んでくる。

『集え蒼き靈たちよ、汝らが友が命ずる』

今思えば、彼女の矢は神木が何かできていたのかもしれない。神木などの樹齡の長い木には、人間でいう『靈頸』のようなものが出来ることが確認されている。靈力を医療用に転用する技術も現在研究中だ。

「なるほど……それは、将来が楽しみですな。」

「……あの二重人格がちょっと……」

思わずといった様子でもらす悠里。

彼女の豹変についていける人材はかなり少ないのではなからうか。

あわてて口を押えたが、玉響教授は苦笑している。

どうやら学園側も彼女の扱いには苦労しているらしい。

「さて、では私は戻るとします。あなたも起き上げるようでしたら、部屋に戻ってかまいませんよ。」

「え？ あの、医務の人は……？」

「『休むべきか、そうじゃないか。それすらわからん人間はすぐ死ぬ、放っておけ。』……と、言っておりましたよ。それでは。」

あまりの暴言に呆然とする悠里を置いて、玉響教授は医務室を後にした。

「スキル 超感覚 ……あの力はそんなものなのでしょうが……もっと、強烈な、何かの力が……」

医務室を出た老婆は、車椅子を進めながらつぶやく。

「私も、歳ですかねえ。」

老婆は苦笑しながら首を振った。

第四話 夢に見たモノ（後書き）

お気に入り登録してくれた方、ありがとうございます！
二日に一話ぐらいのペースで頑張るので、お付き合いください！

第五話 彼女の覚悟（前書き）

難産でした……。

第五話 彼女の覚悟

翌日。

窓から外の校庭を眺めながら、悠里は今朝あった出来事を思い出していた。

なんだかんだ言って早起きしてしまった悠里は、愛用の槍を持って訓練場へ向かおうとした。

……ドアが開かない。

ゆっくりと昨日のことを思い出す悠里。結局気絶していたのは四時間ほどで、夕ご飯は食いそびれた。そのあと部屋に戻ると、死んだようにもう一度眠った。

……そんなことよりもドアが開かない。

鍵が閉まつてる感じではない。というか、昨晚閉めた記憶がない。何かがドアの前にあって、突っかかつてる感じだ。

悠里は仕方なく窓から出ると、ドアの前にあるであろう物体を退けるべく、もう一度寮の建物の中に入る。
ドアの前にあった……いや、いたのは。

「……………zzz」

「お前かよ!!」

ドアに背を預けて眠りこける鳳院雪那だった。

「で、なんで俺の部屋の前にいたんだ？」

「……………謝罪？」

「なんで疑問形なんだ……………？」

とりあえず彼女を部屋に入れると、ベッドの上に座らせる……………と、寝ようとしやがったので、引きずりおろす。

聞いてみた質問には疑問形で返された。

「……………私にはわからない。」

「お前が知らなかったら誰も知らないから!!」

思わず声を大にして突っ込んでしまった。どうも彼女といるとペー
スが崩されてしまう。

ジト目で雪那を見ると、なぜか眠そうな瞳でどや顔された。……………

大丈夫かこいつ。

「私じゃなくて、姫が。」

「姫？」

ここで悠里は思い出した。彼女が二重人格の持ち主であることを。
姫というのは間違いなくもう一つの人格……………あの時戦った傲岸不

遜な戦闘狂のことだろう。

「……………あいつが、謝罪？」

「そんなに不満か。」

「っ！？」

どうやらいつの間にか入れ替わっていたらしい。眠たげな表情は鳴りを潜め、代わりに威風堂々とした少女が腕を組んで座っている。その唇はへの字型に曲げられ、悠里が言ったことが相当に気に食わなかったようだ。

「私のことは姫とも呼んでくれればいい。私もその方が呼ばれ慣れている。」

「……………」

「そ、そんな顔で見えるな！ 私だって姫と呼ばれるのは恥ずかしかったのだ！ だが雪那が言っても言ってもやめないんだ……………！」

そりゃ本人が自分に文句言ってもな。言うこと聞かないだろう。

「そんなことより、昨日はすまなかった。お前を試すようなことをして……………間違いない。お前は一流の戦士になれる。」

「ああ、別に気にしてないからいい。」

実際勝てたわけだしな。

全く何も問題はない。

「本当だな？ たとえお前が私の矢を全て見切って大きく回避したのに、恐れて大げさに避けた拳句酸欠で倒れた愚か者として生徒の間で噂になっていて、私が自分の手の内を晒したくないという理由でその噂を助長していたとしても許してくれるんだな？ よかったよかった。」

「ちょい待てこら。」

そのまま部屋を出ていこうとする姫の襟首を掴んで引き戻す。

「どうした？ お前は謝罪を受け入れてくれたじゃないか。」

「その話は初耳だ。どういうことだ？ お前のあの矢は普通だと見えないのか？」

彼女はためらうように首を振った。

「……………そうだな。パートナーには話してもいいだろう。」
そして姫の独白が始まった。

霊姫。

それが私のスキルの名前。

能力はいたって単純、霊力の増大、周囲の霊力の吸収、そして霊たちの力を借りることだ。

霊たちの力を借りるというのは、その場に存在する残留思念を霊力に変換できるということ。戦場などの恨みの強い残留思念は攻撃力に。病院などの安らかな残留思念は防御力に。お前に行使した『増矢』の術式も私が独自に開発したものだ。恨みの念を『矢』という形に凝縮して撃ち放つ

そういう業の深い技なんだ。ん？ いまいちよくわからないって顔をしているな。なに、簡単な話だよ。私は死んだ人たちの強い感情を変換して力に変えているということさ。

……………ゆえに、私は、味方が死ねば死ぬほど強くなる。

味方がいなくなればなるほど、私の攻撃の力は増大していく……………

本当に嫌な能力だ。

……だがな、葛城悠里。私はそれを受け入れた。雪那を守るためならば、とな。たとえ力を使つたびに怨嗟の声が聞こえたとしても、だ。

もちろんこの覚悟をお前に押し付ける気はない。ただ、お前にも雪那を守つてやつてほしい。

……なぜかつて？

霊たちに寵愛されて生まれてきた私には、わかるんだよ。お前は信頼に足る者だということが。

「……………買い被りだな。」

今朝聞いた話を思い出した悠里は、自嘲するように笑つて見せた。知り合つてわずか一日。

スキルの詳細を話し、自分の大切な者の命を預ける相手を判断するには短すぎる。隣で眠そうな顔をしている雪那を一瞥すると、悠里は授業に集中することにした。

朝、話をしていた二人が連れ立って部屋を出たのを見た同級生が、

いらぬい噂をたてたことは余談である。
もつとも、このうわさが彼らに仲間を増やすことになるのだが。

????

そこは暗い部屋。四人の男女がテーブルに座り向き合っていた。

「目覚めたか。」

「そうだな。」

「無限にして夢幻。無にして有。全てを司り、全ての眷属……アルデリア。」

「彼女が復活したのならば、急がねばならない。」

「彼の覚醒にはもう少し時間が必要です。」

「姫君は？」

「そちらはすでに。問題ないでしょう。」

「わざわざ“E”まで使ったのだ……覚醒してもらわねば困る。」
「計画を早めますか？」

「そうだな。」

「禍神の干渉は？」

「まだ、ありません。しかし力を蓄えているようです。」

「気を付けておけ、奴は何を考えているのかわからん。」

「わかっています。」

「アルデリアが目覚めたということは……」

「あの二匹もじきに目を覚ます。平穩は終わりだ。」

「ああ、そうだな。」

彼らは信じている。自分たちの行動が人道にもとる行為だとしても、
最善の道を選んだのだと。

第五話 彼女の覚悟（後書き）

感想・アドバイス・評価などがありましたらお願いします。
感想をもらえると作者は泣いて喜びます。

まあ少し次回予告を。

「飛行型の【災禍】だと……！！　こんな量は無理だ！！」

「九州防衛ラインが突破された模様です！！」

「くそ、海からもか……仕方がない。学生も動員する！」

「まだだ……奴を……アラバスタを倒すまでは死ねないっ！！」

「……私だって、戦える！」

次回。力の意味。

次話だけ長くなりそうです。

第六話 力の意味 (前編) (前書き)

策謀系の文章を書くのが難しい……。
次回予告とはかなり違う形になりました。ごめんなさい。
今回文量多めです。

第六話 力の意味（前編）

『九州防衛ラインが突破された

。』

その知らせを悠里が聞いたのは、雪那との決闘から一週間が過ぎたあたりのこと。学園は当然、ハチの巣をつついたかのような騒ぎになった。

そもそも、九州防衛ラインとは何か。

人類が最も対処しやすい【災禍】は、陸上を行動する熊などの【災禍】である。

逆に、もっとも対処しづらいのは海に潜む、蛸や魚のような【災禍】。それは少し想像すれば簡単にわかることだ。海の生き物に対して、人間は常に不利を強いられる。

【災禍】ですら破れぬ網。それもいいだろう、だが、その網を固定できる場所はない。下手に船につければ、海底に引きずり込まれるからだ。では今まで人間は鯨など、力に劣る生き物をどうやって捕えてきたか。

銚や、銃や、大砲。だが強力無比な外殻を持つ【災禍】は、遠距離系の貫通武器の相性最悪の天敵である。

そこで日本政府がとった対策は、沿岸地域の放棄だ。

海に棲む【災禍】を陸上で迎え撃つ。

その結果生まれたのが、沿岸地域よりも後ろの陸上に張られた三つの防衛線である。

北海道防衛ライン。

本土防衛ライン。

九州防衛ライン。

九州防衛ラインが破られたというのは、一般人が住む内陸居住区域に【災禍】の侵攻を許したということである。

日本政府としては由々しき失態だが、情報が明らかにされるにつれて、日本政府の責任ではないことが判明した。

第特級【災禍】、ホーホーホー。

第二級【災禍】、オニカモメ。

海と空からの同時奇襲。さしもの日本政府も、【災禍】が軍団さながらの統率を持って襲い掛かってくるなど、想像の埒外であった。オニカモメの群れの数は百を超え、ホーホーホーにも百を超える未確認の海棲型【災禍】が付き従っているという。

この侵攻に対し日本政府は、学園で戦闘訓練中の学生も戦線に投入することを決定。

この決定に対し、異を唱える国民は少なかった。

超常の力を振るう彼らに、恐怖心や嫌悪感を覚えている人間も、決して少なくはないからである。

そして、学園の戦闘科に所属する全員が、九州へと向かうことになった。その数、二百六十三人。うち、三十八人が新入生である。

「諸君。これより、我らは走って（・・・）九州へと向かう。全員、右手を上げよ！」

軍服の男性が声を張り上げる。その声に従い、全員が右手を掲げた。

彼の名前は加藤鉄雄。世界的に有名なスキルの持ち主である。そのスキルの名前は 強行進軍 。世界でも三十数件しか確認されていない、他者へも効果を及ぼすスキルの持ち主。非常に希少なスキルである。

「軍神よ、我らに大地を駆け抜ける力を与えたまえ……………！！」

強行進軍 が起動する。

右手を挙げた生徒たち全員に、力が漲るのが分かった。 強行進軍 という名称のスキルだが、決して移動専門のスキルなどではない。対象となる全員の体力、持久力、脚力を上昇させるスキルだ。

「これより全員、全力疾走！！ 死に物狂いで戦場に向かう……………遅れるな！！」

暫定的ではあるが、彼はこの部隊の指揮官である。全員が、体内に満ちた力の求めるままに、大声で応えた。

なぜ空路や海路、新幹線などの交通手段を使わないのか。その理由はいたって単純、道中【災禍】に襲われると移動できなくなるからだ。

船を沈められる。飛行機を落とされる。新幹線の線路が壊れている。これらの事態が起きた瞬間、移動するための時間が大幅に上昇する。逆に、 強行進軍 を使つての移動だと、全員が固まって移動する。現れた【災禍】を数の力で圧倒しながら戦場に向かえるのだ。

「とはいえ、こいつはちょっとハードだな……………！！」

となりで上級生が呟く。だが 強行進軍 によって上昇している体力は、大剣やハンマーといった重い武器を使う人間にとって非常に都合がよかった。自分のスタミナを考えずに、常に最大の力で武器を振るうことができるからだ。

そのため、遠距離支援型である雪那と、ちまちま槍で削るという悠里の出番はほとんどなかった。

学園が存在する関東圏内から、わずか一日で、彼らは旧中国地方（【災禍】によって荒らされた領土は、すでに地方や県という区分を失っていた。）にたどり着いた。

「私の出番はここで終わりだな。では、武運を。」

言って、加藤鉄雄はその姿を消した。と言っても、自身に 強行進軍 をかけ、旧東京に戻っただけだが。

九州防衛ラインが突破されて三日。学園の生徒は、政府が管轄している船に乗って、海峡を突破する。

「いよいよ実戦だな、雪那。」

「……………今更。」

九州の大地に降り立った悠里は、どこか刺々しい緊張感に満ちた空気にその身を震わせる。対する雪那は、眠そうにその瞳を細めるだけ。

この時点で、【災禍】と人間の戦いはほぼ互角の様相を呈していた。いつあるかわからない襲撃に、人間が警戒し、【災禍】が時折思いついたかのように襲ってくる。それをかろうじて人間が押し返す。リーダーであるのであろう、第特級【災禍】ホーホーホーを倒さない限り、この戦いに終わりはないことは誰にでもわかった。

全長約二十五メートル、それが海蛇の異常進化型であるホーホーホーの大きさである。かつてイギリスでその姿が確認された時もそのくらいであった。その体で潰されでもしたら、どうなるかはわかりきっていた。

悠里たちが戦場に着いた二時間後。

【災禍】が襲撃してきた。と言ってもこれは様子見のようなものだったらしく、小競り合いをすると海に引き上げていった。幸いだったのは、早めに空を飛ぶ【災禍】、オニカモメを片付けられたことである。これは『飛燕』と呼ばれる男性が九州の防衛を担っていたからなのだが、こればかりは幸運というしかなかった。

この襲撃の時、遠くの海からフクロウが鳴くような音が聞こえてきた。第特級【災禍】、ホーホーホーがこちらの際を窺っているのだ。

ほー…ほー…

遠くから聞こえてくる音に対して、仲間たちはおびえるどころか安心していた。ホーホーホーは遠くにいる、ここが襲われることはない…と。実際その襲撃の時、ホーホーホーの姿は遠洋に確認され、音もその方向から聞こえて来ている。

彼らは【災禍】に対する認識が甘すぎた。

【災禍】は、生き物なのだ。学習もするし、知恵も絞る。上層部はそのことを知っていたが、本質を見誤っていた。

固い甲羅を持つ、蟹の【災禍】の注意をひきつける。

「お願いします！」

「おうよ！」

目の前でめまぐるしく動く槍に気を取られた蟹は、背後からのハンマーの一撃で潰された。ハンマーを振り下ろした巨漢が、態勢を整えるまで、悠里は槍で牽制を続ける。

「私もいるぞ。」

次の瞬間、遠方より飛来した矢が、蟹の甲羅を貫いた。青白く輝くその矢は、間違いなく鳳院雪那のもの。とりあえず周囲の敵が一段落したところで悠里は周囲を見渡す。

（なんだ、何かがおかしい……）

超感覚を起動している悠里には、ほー…ほー…という音がしつかりと聞こえる。その音の出どころがはるかな遠洋であることもわかる。だが、悠里の勘が告げている、何かがおかしいと。

「どうした、悠里。」

「ああ、いや……………」

言葉を濁す悠里に、雪那は納得したような表情で遠くに見えるホーホーの影を見る。

「全く、あの音は落ち着かない。どうして意味が無い所で鳴いているんだろっな？ そんなのは自分の居場所を教えるだけだろっに（．．．．．）。」

「……………！！」

はじかれたように悠里が後ろを振り返った。人類が作った拠点では、意識が完全に前方に集中している。側面への対策を何も取っていないように見えた。警戒すべきホーホーホーは前方にいるし、ほかの【災禍】が側面から襲い掛かってきても、対処できるだけの戦力はあるのだろっ。

ホーホーホーは音で敵を惑わす。しかし、その姿も見えている。警戒することはないのかもしれない……………。

いや、それは違う。

（派生スキル解放、 並列思考 ！！）

「……………？ どうした、悠里？」

【災禍】とは遺伝子の異常進化によって生まれた生き物である。それが繁殖しないと一体誰が決めた（．．．．．）？

その考えに至った瞬間、拠点の右脇の海から、全長四十メートル近い海蛇が勢いよく上陸してきた。

第六話 力の意味 (前編) (後書き)

ど、どうでした？

楽しんでもらえたなら良いのですが。感想や意見などがありましたらお願いします。

第六話 力の意味 (中編) (前書き)

厨・二・全・開！
痛くてもいいのさ。

第六話 力の意味（中編）

勢いをつけて上陸したのだろう、濡れているホーホーホーの体は勢いよく拠点へと滑ってゆく。一瞬悠里は、拠点がそのまま潰される光景を幻視したが、そんなことにはならなかった。スピードを落としたホーホーホーは、その身をくねらせて拠点へと接近していく。沿岸部から一キロほど離れた場所にあるとはいえ、最初の滑りで三百メートルは詰められている。

陽光に照らされた深緑色の体表が怪しげに輝く。

「くそっ！」

最初に平静を取り戻したのは悠里だった。槍を抱えて拠点へと走る途中で呆然としている男や女を叱咤しながら、障害物をかわして、拠点へ向かう。

おそらく遠洋に見えるあいつは、ホーホーホーの子供か何かだ。よく考えれば気づけたはずなのだ。

イギリスで見つかったホーホーホーの大きさも、襲いかかっていた海蛇の大きさも二十五メートル。だが、生き物である以上【災禍】も成長する。そのままの大きさということはありえない。

「ギヤアアアアア！！」

身の毛のよだつ断末魔が戦場に響き渡る。行く手を遮ろうとした誰かが、その超重量に押しつぶされたのだろう。拠点まであとおよそ六百メートル、速度を加味すればあと二分ほどでたどり着いてしまう。

（不意を突かれてあれに対抗できるか……………！？）

悠里は必死に拠点にいるであろう戦力を思い浮かべる。
一般の戦闘員が二十数人。だが特級【災禍】ともなれば、対抗できるのは俗にいう二三名持ちしかないだろう。

『飛燕』。『乖者』。『天剣』。

（くそつ、『鉄壁』がいれば……………！！）

いまこの戦場にいる人間では、あの海蛇の侵攻を止めることが出来ない。現に今も何人かが攻撃を仕掛けているようだが、その全てを跳ね除けて海蛇は拠点へと向かっていく。

「お……………がい……………」

その時、悠里の耳が誰かの声を捉えた。超感覚 によって上昇した聴力でも聞き取れないほどかすかな声だったが、その声は続けて朗々と戦場に響き渡る。

（止められるのか……………あの巨体を。）

「御身が元へと届け

」

「 並列思考 解除！！ 派生スキル解放、 鷹の目 ！！」

悠里は並列思考を解除すると、超感覚で視力を上昇させて派生スキル 鷹の目 を発動する。

その目に映ったのは拠点である建物の周囲を渦巻く膨大な量の霊力。『乖者』が霊術を使おうとしているのだろう。だが話に聞く限り、彼女の霊術は支援に特化していたはず、結界霊術を使ってもあの巨大な海蛇を止められるかどうか。

「我が願いを聞き届けよ」

渦巻く霊力が半透明の膜となって建物を覆っていく。この段階ではまだ物理的拘束力はないが、何らかの気配を感じ取ったのだろう、ホーホーホーがその速度を上げた。挽き潰された者の悲鳴が再び戦場に響き渡る。

「くそっ、あれじゃ間に合わない……」

一分でいい。

結界を完成させるための時間が必要なのだ。

「邪なるものを締め出せ」

両目から一筋の血が流れる。派生スキル 鷹の目 による反動だ。眼窩の痛みをこらえ、限界を超えて力を引き出す。

（やるしか、ない！）

「派生スキル解放……… 並列思考 ……！！」

再びの頭痛が悠里を襲う。派生スキルの同時解放……代償が大きい
ため、悠里が禁じ手としていた戦法だ。

目の前をのたうつ巨体に言葉を失う。だが呆然とした思考とは別な思考が、即座に弱点を探して動き出す。
深緑色に輝く、鱗に覆われた体表。
そこに、槍を叩きつける。

ダメージが無くてもいい。こちらに気を引かせて、結界完成まで耐えられれば、後は逃げればいい。
それが悠里の勝算だった。

ギンッ！！！！！

……………そんな。

渾身の力で振り下ろした槍は、鱗に阻まれ、下の筋組織にはじき返された。

悠里の視界の端に、黒色の尻尾の先端が映る。

（まずっ……………！？）

そしてのたうつ尻尾の一撃が、悠里の体を直撃した。

「おお悠里よ死んでしまうとは情けない。」
「は？」

悠里は、見覚えのある景色に首をかしげた。周囲は一面の雪景色、かつて訪れた悠里の精神世界だ。一つだけ前と違うところがある。目の前にいるのが、母の姿をしているなにかではなく、なぜかRPGに出てくるような王様なのだ。セリフも、どこかで聞いたような気がする。

「だが、特別に儂が生き返らせてやろう。」

さつきからかなり無茶苦茶なことを言っているが、どうも現実感がわかない。その理由が目の前の王様とその口調にあることは明らかだった。

「どうなってるんだ、俺は？」

「ふむ、瀕死のお前の状態を聞きたいのか？ 相当グチヨグチヨだぞ？」

「……………いや、やっぱいい。で、生き返らせるってどういうこと？」

「お前が死ぬ直前、派生スキルを解放しただろう？ スキル 天衣無縫 の発動条件は、同時に二つの派生スキルを解放すること……………」

「……………」
「スキル 天衣無縫 ……って何？」

「『海は裂け、大地は砕け、天は震える。焦土に立つはただ一人。人に非ざる力を宿すもの』…………それがスキル 天衣無縫 だ。詳しいことは自分で掴め。ではいくぞ。」

「え、いきなり……………」

もたついている悠里に業を煮やした王様は、雪でできた右手を上げ

ると、悠里の頭に乗せた。瞬間。

「ぐっ、……あああああああああああ！？」

突如として体全体に走る激痛。

『思考力上昇中………派生スキル 並列思考 が解放されました。
思考力上昇中………上位派生スキル 分割思考 が解放されました。』

『視力上昇中………派生スキル 鷹の目 が解放されました。視力
上昇中………上位派生スキル 魔眼 が解放されました。』
『記憶力上昇中………派生スキル 瞬間記憶 が解放されました。
記憶力上昇中………上位派生スキル 蘇る閃光 が解放されました。』

『聴力上昇中………派生スキル 地獄耳 が解放されました。聴力
上昇中………上位派生スキル 聞き分ける者 が解放されました。』

うるさい。うるさい。うるさい。うるさいうるさいうるさいうるさい
うるさいうるさいうるさいうるさいウルサイウルサイウルサイウルサイウ
ルサイウルサイウルサイウルサイウルサイ………！！

「耐えろ、葛城悠里！ お前はここで死んでいいのか！？」

イタイ。イヤダ。

ハハノカタキヲトルマデハ………シネナイ。

「ああああああああああああっつつつつ！！」

悠里が雄たけびを上げる。

周囲の雪が舞い上がり、空中に無数の槍を形成していく。

『合計八つの派生スキルの解放に成功しました。真力の一つ、天衣無縫が発動します。』

瞬間、悠里の意識が覚醒した。

第六話 力の意味 (中編) (後書き)

お気に入り登録してくれた方に、失望されないように頑張ります。
試験前に入るため、更新が遅れます。

第六話 力の意味 (後編) (前書き)

『飛燕』さんの話はまたのちほど。

今回は『乖者』さん視点を入れてみました。悠里がいかにも無双して
いたかwww

「なんだ!？」

天をも揺るがす咆哮が聞こえたのは。

意識が戻ったとき、最初に感じたのは体が動かないということだった。

内臓の四割以上が破損し、骨もかなりが砕かれている。死んでない方がおかしい状態だった。

だが、悠里の体が蘇生していく。それを悠里はどこか他人事のように感じていた。

(… 止めなければ。)

何を？

【災禍】を。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ
ッ!!!」

叫ぶ。体に走る激痛を無視し、走る。完全に治った体は、大地をえぐりながらホーホーホーに向けて駆け出した。

右手に握った槍を思いっきり体表に叩きつける。貫く。

「纏え、
靈槍
！」

青白い靈力を纏った槍が、ホーホーホーの鱗を砕く。砕いて、貫通する。

同時に、スキル 魔眼 によって、視界の端に赤いラインが表示される。悠里はそれを一瞥すると槍を手放して思いつき跳躍する。振り返ったホーホーホーの口が、直前まで悠里がいた場所を薙いだ。回転するようにその身をくねらせたホーホーホーは、上空の悠里に向けて、尾を振り上げる。

悠里は身をひねってそれをかわすと、尾の端を掴んで足がかりにしてさらに上空へと跳躍した。

「集え集え集え

」

右手を掲げる。雄叫びを上げる。

単体で完成された存在である 天衣無縫 の使い手。本能でもって靈術を駆使し、直感でもって武器を振り回す。

「数多の星よ、撃ち貫け

」

その場に浮かんだのは、無数の蒼き星々だった。全てが凝縮された靈力の塊。

白き光に包まれ、煌々と輝く赤眼でホーホーホーを見据える。落下を始めた悠里は、自身の右腕を思いつき振りかぶった。その右腕に、周囲の星々が収束していく。

「

『星槍』。

」

撃ち放たれた一条の光芒が、海蛇の胴体を縫いとめた。

「我が言霊を以て、守護せよ。」

最後の祝詞を完成させた柚野莉璃^{ゆずのりり}は、閉じていた目を開いて、両手で握りしめた水晶に霊力を通した。練に練り上げた霊力が水晶に刻まれた結界の式にめぐり、広範囲の結界霊術を起動させる。そして前を見て驚愕した。

白い光が、ホーホーホーの周囲を飛び回っている。莉璃はあらかじめ編んでおいた式に霊力を通すと、自分の視力を上昇させる。

（っ、鬼………？）

第一印象がそれだった。赤く輝く瞳でもって、大地の海蛇を傲岸に睥睨する人ならざる者。

と、白い光が、海蛇の尾に叩かれて上空に吹っ飛んでいく。直後、白い光の周囲に膨大な 自分が結界に使用した霊力のおよそ二倍の 霊力が集まってくのを、莉璃は感じた。

「集え集え集え

」

白い光の周囲に浮かぶのは、無数の蒼き星たち。それ一つ一つが莫大な力を秘めた霊力の塊だ。

「アアアアアアアアアアアア！！！！」

空気を震わせる鬼の咆哮。地形を変形させるほどの音量はもはや暴力に等しい。

人間では、鬼^{あれ}には勝てない。

「嘘……………式も使わないで、あの量の霊力を制御しているっ……………！！？」

「あの霊術は、まさかつ……………！！？」

二つ名持ちたる二人が、信じられないという声を上げる。前者は技術的な意味で、後者は二度と見れないと思っていたがゆえに。

それは、『飛燕』がかつてともに戦場をかけた一人の女性の切り札だった。

「『星槍』。」

収束した星々が、一本の槍となってホーホーホーの胸に直撃した。

『星槍』も、ホーホーホーに対する決定打とは成り得なかった。何を以てそこまで点に対する衝撃に強い外殻を得たのか……………その

答えは誰にもわからない。

（駄目だった、か……………）

眼下で暴れる海蛇を見て、悠里は苦笑した。落ちていく体と、墮ちていく意識。

自身の禁じ手を解放し、なおかつよくわからない強大な力を使ったにもかかわらず、殺し切ることはできなかった。

（でも、なんだったろうあれは……………）

『星槍』がホーホーホーの体表に直撃する寸前。

漆黒の防壁が、一瞬槍を受け止めたのだ。数秒と持たずに崩れ去っていたが、あれのせいでホーホーホーの体を貫けなかったのだろう。見たこともない漆黒の盾。だが、何のために。

（それより、この力は、いったいなんなんだ……………？）

スキル 天衣無縫。

（この力に、何の意味が……………。）

その正体を考える前に、悠里の意識は闇に落ちた。

第六話 力の意味（後編）（後書き）

えっと、伏線を張り過ぎたか……？ が、頑張ります。

雪那さんが空気ですねわかります。

……彼女も戦っていたので責めないで上げてください。責められるべきは文章力のない作者です。

感想、評価をお待ちしております！

第七話 閑話（前書き）

更新遅れてすいません、急ぎで作ったため、文章がぐちゃぐちゃです。しかも今回主人公出てきません。ストックの大切さを知りました。

第七話 閑話

陸上にホーホーホーが現れたのとほぼ同時に、遠洋に見えていた海蛇もかなりのスピードで沿岸に向かってきていた。

二段階の奇襲。

ホーホーホーに気を取られているところに、その子供が突進しに来たのだらう。

「ふむ。これは一本取られたというべきかな。」

雪那は呟いた人物を見て驚愕した。

身の丈を大きく超えた大剣。身長も二メートルに届こうかという偉丈夫。そんな特徴的な外見をもつものなど、日本には一人しかいない。

「『天剣』……………!!」

「いかにも、私が『天剣』だ。」

日本には二つ名持ちという存在がいる。

現在の二つ名持ちは六人。

『天剣』。

『乖者』。

『飛燕』。

『鉄壁』。

『禍神』。

『神槍』。

それぞれが強力なスキルを持った個人であり、【災禍】に対する最終兵器とでもいうべき存在だ。

現在『神槍』が行方不明になっているため、実質日本にいるのは五人。そのうちの三人がこの戦場にいることになる。

「あれを止めねばならん、か。手伝ってもらうぞ、学生。その武器はお飾りではないだろう。」

日本で最強と名高い男の目は、今まさに上陸した、ホーホーホーの子供へと向けられていた。

「ぬうんっ！」

『天剣』が、通り過ぎようとする【災禍】の脇腹に全力で大剣を振り下ろす。

その大剣は奇妙な剣だった。刀のように反り返っているわけでもないのに、片刃なのだ。通常大剣は両刃の剣である。

だが、この光景を見たら、その理由が分かっただろう。

ドンツという爆音とともに、大剣の後ろの部分が火を噴いたのだ。その勢いで加速した大剣が、海蛇の体に食い込む。海蛇が悲鳴を上げる。『天剣』はそのまま大剣を振り切ると、いったん後ろに下がった。

「硬いな……………」

『マスター、来ますよ。』
「大丈夫だ。」

バシユウウウウ、という排気音とともに、刀身の冷却が開始される。彼が握る大剣は、日本の技術力を結集した世界で一本しかない剣だ。人工知能を搭載し、推進エンジンを付けた大剣。彼はこの剣とともに、あまたの戦場を生き延びてきた。

迫りくる海蛇の目に、一本の矢が突き刺さった。雪那による射撃である。

「ここまでピンポイントで狙えるのか……………」
『リロード完了。いつでも行けますよ。』
「今までのまんま。次で決めるぞ。」

異様な進化を遂げた【災禍】に、長期戦を挑むのは愚の骨頂である。自身が持つ最強の攻撃で一撃で決めるのが、本当の戦い方だ。

「全爆裂機構解放。モード『フルバースト』。」
『モードフルバースト……………リロード終了。』

排煙を上げる大剣。目の前でのたうつ海蛇の頭部へ振り下ろす。

「ぬおおおおおおっ!!」
『弾数、残り6!』

ドンッ、と爆発音を以て大剣が加速する。本来ならここで一度距離を取り大剣を冷却するのだが。
海蛇の頭部に大剣が食い込み、悲鳴を上げる。大剣は固い物を切断

しようと、鱗を割っていく。

「二弾っ！」

『弾数、残り5！』

食い込んだ大剣の後ろで、再び爆音が響く。今度はより深く大剣が食い込み、完全に鱗を割った。当然こんなことをすれば大剣が持たない。刀身は赤く熱を帯び、いたるところから不吉な音が上がっている。壊れるのも時間の問題だ。

「全弾解放……………！！」

持ち主の意思をくみ取った大剣が、残った全ての固形燃料に着火する。ひときわ大きな爆発音が上がり、大剣は海蛇の頭部を両断した。

「！！、すまん、な！」

直後、彼は大剣を手放して後ろに跳び退ると、全力で走り出す。

大剣が爆発した。

その中の破片が、逃げる彼の背中を追いかけて飛翔する。とがったそれが刺されば、いくらなんでも致命傷である。

しかも彼はそれに気づいていない。破片が背中に到達する寸前

キンッ、という涼やかな音を立てて、一本の矢が破片を弾き飛ばした。しかも、その場に霊力で編まれた障壁を展開し、迫りくる全

ての破片を受け止めて見せたのだ。

「鳳院雪那、か。素晴らしい腕前だな。」

彼はそう呟くと、ゆっくりと戦場を後にした。

陽光が降り注ぐ、春の九州。

その上空に、一人の男が浮かんでいた。全身を黒いコートで覆い、その各所には戒めのように鎖が巻き付いている。しかしそんな奇妙ないでたちより、男が宙に浮いている方法が問題だった。霊術によって宙に浮かぶことはできる。もちろんかなりの霊力を消費するが、不可能ではない。しかし、男はそんな方法で浮いているのではなかった。

乗っているのだ。【災禍】に。それはアラバスタと呼ばれている大鷲の【災禍】である。

「奇襲は失敗と。しかしここに天の人がいるとはねえ……これはちよつと計画を修正した方がいいかな？ あやうくあの子も殺されるところだったし。」

ぶつぶつと独り言を呟く男。いくら春とはいえ、相当な高度である。寒くないはずはないのだが。

「神話級も動き始めたしねえ……………全く『門計画』の人たちは何考えていたんだか。」

そう呟く男の周囲に、黒い人型がゆらゆらと揺れる。計七体の人型は、一斉に男の体に跳びこんで消えた。

「うんうん、ガードご苦労さん。さてと、ぼくたちもそろそろ出番なのかなあ。とりあえず帰ろうか。」

言って、男はアラバスタに乗ってどこかに消えた。人類が彼らのことを認知するのはまだ相当先である。

神々の雑談。

「いやーものの見事に暴走したね。」

「『暴走したね』『じゃねえよ……………ほんとお前の脳みそは何できてるんだ？』『豆腐かなんかか。どうすんだよ、完全に世界は動き出したぞ？』」

「天の名を冠したスキル……………解放まであと二つ。」

「おい、人の話聞いてんのか？　おい！」

「楽しくなってきたね！　天衣無縫　天聖靈姫　天騎駿槍
が覚醒すんのもそんなに未来の話じゃないよ。『禍神』も動き出す
だろうし。」

「あの毒婦か……正直あそこでおとなしくしていてほしいな。」

「無理だね、それは。あの子、寂しがりだから。」

「病んでるけどな。」

「そう、文字通り病んでるね。神話級も動き出すだろうし、あつち
の世界も最近なんか不穏な動きしてるらしいよ。」

「ったく、だれだよあんなん作ったやつ……迷惑きわまりねえ。」

「えへ、あたしあたしー。でも知ってる？　この話私たちの出番少
ないらしいんだよねー。」

「そりゃ全知全能の神なんか出したら話が終わるからだろう。だか
ら神器しか降ろしてないんだよ。」

「そうなんだけどねー。門開いただけで出番終了、っていうのもな
んかさー。」

「暇そうだな。」

「そうなんだよー。暇だから主人公に女難の呪いかけぐらい暇な
の。」

「……………。（すまん、悠里。）」

「暇ー。」

第七話 閑話（後書き）

余裕がありましたら感想評価をお願いします。

第八話 神と魔獣と異世界（前書き）

なんか、すごい唐突に出てきた感じが強いですが・・・一応、練ってあった設定なので、ご容赦ください。

第八話 神と魔獣と異世界

目が覚めたら知らない天井だった。別に転生したわけではないが、モスグリーンの天井が悠里を見おろしている。

（どこだ、ここは。）

「起きたのね、葛城悠里くん。」

首を巡らして隣を見る。ベッドの脇の椅子に腰掛けて、一人の巫女が座っていた。

「……………巫女？」

「なんでコスプレ？」

「私だって恥ずかしいのよ！ ていうか私のこと知らないの……………」

「ああ……………うん？ いや、なんか見たことあるような……………ああ！」

「思い出したのね。」

「『救世の巫女様（笑）』だ！」

その時の彼女の落ち込み様は尋常じゃなかった。もう完全に落ち込んだ様子で、果物ナイフを繰り返し林檎に突き立てている。彼女の名前は柚野莉璃。日本が誇る二つ名持ちの一人だ。

彼女の二つ名は『乖者』。「あらゆるものを乖離させる者」。

結界霊術や支援系霊術など、霊術の第一人者。あの時拠点にいた二つ名持ちの一人である。

「あんまり彼女をからかわないでくれないか、葛城くん。」

「『飛燕』、『鉄壁』、『天剣』まで!？」

「……………なんでその三人は一目で分かるのよ……………」

彼女の反対側にいたため気づかなかったが、そこには三人の二つ名持ちがいた。なんか彼女が余計凹んでいた気がするが気にしないことにする。

「ふむ。君も二つ名持ちだぞ？」

「は？」

「日本政府は君に『白鬼』の二つ名を与えた。史上七人目の二つ名持ちの誕生だ。」

……………。

「俺まだ学生なんですけど。」

「強さに身分は関係ない。」

身長二メートル近い偉丈夫が断言した。そんな大男の発言に、小柄な少女がため息をつく。

「もちろん、公にはされません。あなたはいわば、隠れた切り札です。」

『鉄壁』。その華奢な体に秘めた霊力の量は、常人を軽く上回る。無数の防御系霊術を使いこなし、攻撃しか考えない『天剣』のサポート役だ。

「まあこれからよろしく願いますね。」

「うむ。後で模擬戦でもやろうではないか。」

「自重してください。あなたは武器を失ったばかりでしょう。」

「あれは我の実力不足よ。実力を上げるためにも……………」

「だいたいあなたはいつも……すみません、話がそれましたね。あなたは『白鬼』という二つ名で、日本政府直属の厄祓いとなります。」

厄祓い。

二つ名持ちを総称するという言葉だ。もちろん【災禍】を倒すものが語源である。

「はあ。ところで、学校はどうなるのでしょうか。」
「学園にはそのまま通っていただきます。」

その時、ようやく莉璃がショックから立ち直ったようだ。栗色の髪を持ち上げながら、穴だらけになってしまった林檎に齧り付いていたが。

「愛華。そろそろ時間。」

もぐもぐと口を動かしながら莉璃が告げる。

その視線は壁に取り付けられた時計へむいている。その時計の時刻は、今が昼の一時であることを示していた。

「では行きましょう。葛城さんは落ち着くまでここにいてくださいね、のちのち連絡しますのです。」

そう言っただけで彼らは出て行った。ぱたんとドアが締まる音がして、約一分後。

「居るんだろ。出て来いよ。」

「これも《天衣無縫》の力、ですか。」

ベッドの正面の位置に配置された木製の椅子に、水が染み出すようにひとりの妖艶な女性が姿を現した。

金色の豪華な髪を後ろに垂らし、世の全ての女性がほしがるような完璧なプロポーションを持つ女性。その瞳は人にあるまじき、髪と同じ金色の光を宿していた。

「よくわかりましね。」

「ああ。なんでわかったのかは、わからないが・・・」

「自己紹介は？」

「必要ないだろう？ 第神話級【災禍】にして知識の泉の主、ヨルムンガルド。」

「ならこちらもしりませんね。神の尖兵にして救世主、《天衣無縫》の使い手よ。」

二人はさも当然のように会話を始めた。まるで旧知の仲であるかのように。

しかし冷静な悠里の理性はこいつとは初対面だと告げているし、そもそも名前すら知らない。けれど名前は勝手に口から出てきたし、胸の内から根拠のない懐かしい思いが湧き上がってくる。

「神の尖兵、か。そんなものを引き受けたつもりはないな。」

「天の名を冠したスキルはその証拠です。」

「スキルがどうあれ、俺は俺だ。誰かの手先になるつもりはない。」
「そうだといいですね。」

和気藹々と雑談を続ける二人。最近悠里の神経は日増しに図太くなつてきてはいるが、ここまでではなかったはずだ。

神話級【災禍】。それは特級より上の力を持つ【災禍】の総称である。

悠里の場合は口から勝手に出てきたので知る由もないが。かれらは今のところ三体存在する。

『知識の泉の主』、『世界を囲う者』、『無限にして夢幻』など称される、ヨルムンガルド。
『魔を統べる狼』、『鎖に因われぬ者』、『限界にしてその先』など称される、フェンリル。
『天駆ける翼竜』、『不死身の神鳥』、『始源にして終焉』など称される、フェニックス。

当然、彼らはこの世界の生き物ではない。

全ては、ひとりの狂った科学者から始まったのだ。人口の増加により、慢性的な食糧不足に悩まされていた世界。ひとりの狂人が、異世界に繋がる門を作り上げてしまったのだ（実はこの時、人々の願いの結晶という形で二人の神が生まれたのだが、知っての通り彼女はあまりにも気まぐれすぎた）。

【災禍】とは、その世界でいう魔獣が、この世界で残した子供たち。この世界の生き物の形を多少なりとも残しながら、凶暴化してしまった魔獣。

最も、このことを知っている人間は非常に少ない。全世界でふた桁にも満たないだろう。

「神話級の【災禍】・・・まあ私などのことですが。しばらくは動きませんよ。」

「それはまたなんで？」

「いろいろあるんですよ、こちらにも。内輪揉めとか。」

物憂げにため息をつくヨルムンガルド。

悠里の違和感は消えない。なぜこんな不審人物と、自分は親しげに話している？ まるで魂の底の方から彼女のことを知っていたかのような……。

そこでようやく、悠里は違和感の正体を突き止めた。

母に似ているのだ、彼女は。

外見は似ても似つかないが、喋り方や雰囲気。それが悠里に無意識の内に安心感や親近感のようなものを与えていたのだ。認識してしまえば一瞬だった。

瞬間的に、目の前の存在に猜疑心や恐怖などが湧き上がってくる。ヨルムンガルドも悠里の様子に気づいた。

「気づかれましたか……。」

「お前は、なんだ？」

「異世界に住む、神獣。無限の知識と夢幻の現実を司る、蛇です。」

瞬間、彼女の姿は煙のように消えてしまった。現れた時と同じように、なんの前触れもなく。

（わからないことが多過ぎるな……。）

悠里はとりあえず考えることを放棄すると、ゆっくりとその体をベツドに横たえたのだった。

神々の雑談

テーマ「ひとり追加で。」

「ほらもつと盛り上げて！」

「なあ・・・俺ら何やってんの・・・？」

「カラオケよ！ いやぁ思いつきり歌うのってこんなにきもちいいのね！」

「いやそれはわかるけどさあ。」

「いつけ みんなの夢、まっもるため」

（なんでその曲チヨイス・・・？）

ピンポン。

「お、客かな？」

「愛と勇気だけが」

「（聞いちゃいねえ・・・）はい、どなたですか？」

「いや隣の神なんですけど。」

「あ・・・すいません、ほんとに！ このバカがうるさくしてしまつて。」

「いや違うよ！ そんなことできたんじゃないよ！ 返してくださいよ神器『風の宝玉』！」

「へ？」

「あ、それならこれこれ。」

「マイクの先端・・・おま、まさか神器を拡声器がわりか！」

「便利だよ？ それに、神器ならそっちも持つてったじゃん。『グングニル』。」

「は？」

「え？」

「・・・・・・・・ちがつたかな？」

「ま、まあ、なんか誤解があるようだし、お酒でも飲みながら・・・」

「あ、すいません。」

「いえいえ。」

数十分後・・・

「「「もう仕事なんて知るかー！」」「」」
酔っ払いの出来上がり。

第八話 神と魔獣と異世界（後書き）

ほかの人の作品を読んでいて思うのですが、アンケートって憧れな
んですよね。

やってみたいんですけど、やった結果誰も何も言わないというのは
切なすぎてこわいという感情の板挟みに。今度誰かの過去編を書い
てみたいのですが。

この人の過去が知りたい！という方はお願いします。

あと誰でもいいので、だいたい一話あたり何行ぐらい書けばいいの
か教えてくれるとありがたいです。

さて、次回予告なんですが。

ヘタすると三年ぐらい時間が飛びます。

……いやすいません。本当にごめんなさい。

時間飛ばしはあんまりやらないようにしたいのですが、どうもこの
まますすめるのは難しい気がしたので……。見放さないでくれ
ると嬉しいです。

*神々の雑談は伏線の宝庫です。全知全能のかたが暇つぶしをして
いるだけなので、かれらは全くと言っていいほど主人公とは関わり
ません。

長文、失礼しました。

第九話的な何か。

三年後の視点から振り返った思い出（前書き）

宣言どおり時間が飛びますが、時間が飛んだあとに振り返る形で仲間との出会いの話です。

第九話的な何か。

三年後の視点から振り返った思い出

「・・・・・・・・俺らはなんでここにいるんだ？」

「・・・・・・・・これ、手紙。」

「えっと・・・・・・・・お前らの仲間を紹介しといてくれ。馴れ初めとか、出会ったきっかけとかでいいから。」・・・・・・・・作者の野郎、番外編で新キャラだしといて説明させようってほらだな。」

ええ、そうです。頼んだよ、悠里くん。

「なんか無性にイラつくが・・・・・・・・まあいいたろつ。それじゃあまずは、バカから説明するとするか・・・・・・・・」

ホーホーホーの襲撃から約半年。季節は秋になり、おれはなぜか変な男に絡まれていた。

「葛城悠里！俺はお前に決闘を申し込む！」

「お断りします。」

「お前は雪那さんにふさわしくない！俺が勝ったら雪那さんは俺の班に入ってもらおう！」

「人の話聞けよ、おい。」

「決闘は明日だ！せいぜい吠え面かかないようにするんだな！」

「・・・・・・・・ん？日本語が変だな。」

「覚えておけ！」

茶髪に浅黒い肌。よく引き締まった肉体は、あの背中に背負った大

剣を使うために身につけたのだろう。言いたいことだけ言って去っていた少年は、廊下の端にある柱にぶつかって鼻を抑えている。こつちを振り返ったので咄嗟に見ないふりをした。

少年がいなくなった廊下で一人、悠里は考える。

決闘か・・・場所も指定してなかったし無視していいよな？ と思つて歩き出すと、今度は少女がこちらに向かつて歩いてきた。しかもさっきの少年を引きずつてである。すごい力だな、と思つて感心していると、少女が少年を放り出した。

「ぐばっ！」

投げ捨てられた衝撃に、地震が持つ大剣の重みが加わつて、少年は奇妙な悲鳴を上げた。

「すいません、さっきはこの馬鹿が迷惑をかけまして・・・」

「いや・・・まだなんにもされてないが・・・」

こちらの少女は普通の黒髪だ。どこにでも居そうな少女に見える・・・腰にぶら下げた二丁拳銃がなければだが。

「で、図々しいとは思つのですが、お願いがあります。」

「お願い？」

「私は見てのとおり銃使いです。」

「うん。」

「この男は見てのとおり馬鹿なので。」

「そーだね。」

「なかなか班を組んでもらえないわけなんですよ。」

「ああ・・・。」

確かに、と納得してしまった。【災禍】に効きにくい銃をメインアイテムにする人は少ない、というかほぼ皆無だろう。しかし、そうすると当然、この疑問に行き着く。少し踏み込んだ質問になつてしまふが、

「なんで銃を使つてるの？」

という疑問だ。女性だから膂力に不満があるのだとしても、刀なり、

ナイフなり、【災禍】に有効な武器はいくらでもある。

「私のスキルは《強弾》（アーマーバレット）。なぜか銃を使わないと発動しないスキルなんです。」

それに、と少女は痛いところを付いてきた。

「葛城さんだつて槍を使つてるじゃないですか。」

「う、それもそうか。」

「というか、この班は異常なんですよ。槍と弓という【災禍】に効きにくい武器を使う人だけで構成されているなんて、狂気の沙汰とは思えません。」

「あはははははは……」

全く否定できない悠里。確かにその通りである。

「というわけで、私たちを班に入れて欲しいのですが。それを言った瞬間、この馬鹿がリーダーに相応しいかどうか確かめるとか言つて飛び出しまして。」

「ああ、そういうこと……」

「すいません、自己紹介がまだでしたね。私は橋本絵美、このバカは伊緒恭平といます。」

「葛城悠里だ。」

そういえば少年、もとい、伊緒が起き上がつてこないな、と悠里が視線を下に向けると、橋本さんが大剣ごと伊緒を踏んづけていた。

……見なかったことにしよう。

「一応、実力を確かめてからでいいかい？　あと雪那にも相談しないといけないから。じゃあまたあとで。」

言つと、悠里は逃げるが勝ちとばかりにその場を逃げ出した。

「あつ、待つてください！」

後ろから聞こえてきた声に耳を貸さず、悠里は全力でその場を逃げ出したのだつた。

昼休み。

「……………ということがあったわけなんだが。」

「……………」

「寝るな。」

パカッ。

「……………うう。痛い。」

「面倒くさい……姫、変われ。」

姫と雪那が一瞬で入れ替わる。最近気づいたんだが、こいつ別に戦闘中じゃなくてもちよこちよこ人格が入れ替わっているらしい。

「ふむ。別に（どうでも）いいんじゃないか？ 班のリーダーはお前だ、私はただ雪那を守るだけだからな。」

「いや、なんかさ……伊緒って名前に聞き覚えない？」

「ないな。」

「即答かよ。それはそれで可哀想だな……。」

「？」

「ああいや、こつちの話。」

（頑張れ、少年。こんな奴のどこがいいのかは知らんが、俺は影から応援してるからな。）

同い年ということを通して頭から消し去り、やたら達観した物の見方をする悠里であった。

と、達観した自分を客観的に見て大人になったな俺と悦に浸っている悠里のポケットで、携帯電話が震えだした。

「ん？ 電話か。」

「誰からだ？」

「いや・・・誰だこれ？ 登録してないぞ、こんな番号。もしもし？」

「ああ、やつと出ましたね『白鬼』。自己紹介もせずすみません、挨拶もできないほどホーホーホーの後始末が忙しくて・・・私の名前は驚愛梨^{つくすあいり}、『鉄壁』です。」

「・・・おまえ、なんで俺の番号を知っている？ この番号を知っているのは、三人だけのはずだぞ。」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・ごめんなさい。」

「いや・・・自分で言って悲しくなったから、忘れてくれ。」

「ええ。本題なんですけど、今調べたらあなたの班はたった二人で構成されていますね？ 四人の班にしてください、それで武闘会で優勝して欲しいのです。」

「・・・・・・・・ちよつと待て、順番に行くぞ。なんで知ってるのかってことは置いといてだ、まず、武闘会ってなんだ？」

「知らないんですか？ 毎年一月に開催される学年ごとの対抗戦です。学園唯一のイベントといっても過言ではありません。ちなみに参加の条件が四人チームであることです。」

「なんで優勝しなきゃいけない？」

「申し訳ないのですが、国の重鎮は頭が固い奴らばかりでして・・・私も含む現在の二つ名持ちは全員その武闘会で優勝してます。優勝しなければ二つ名を剥奪すると。」

「べつに二つ名いらないんだが。」

「そういわずにお願いします・・・啖呵切っちゃったんで。」

「・・・・・・・・頑張ります。幸いあてもありますし。伊緒恭平と橋本絵美って人知ってます？」

「ああ・・・伊緒恭平って人のことは知りませんが、橋本絵美さん

なら知ってますよ。双銃使いです。』

「強い？」

『平均よりやや上、ぐらいですね。打たれ弱いですが。』

「ふーん。まあ頑張るよ。」

『お願いします。それでは。』

電話を切った悠里は、今かかってきた電話番号を『鉄壁』のアドレス帳として登録する。さて話の続きを・・・と悠里が振り向くと、えらく不機嫌そうな雪那が立っていた。

「えっと・・・？」

「・・・誰？」

「え？」

「電話の相手よ。誰？」

（というかお前が誰だ・・・？）

こんなに怒っている雪那は見たことがない。

「どうした雪那。何をそんなに怒ってるんだ？」

「怒ってない。」

「いや、どうみても怒ってる。」

「女の声だった。誰？」

「驚愛梨さん。『鉄壁』だよ。」

隠す理由もないので、正直に告げる悠里。すると、雪那の機嫌がさらに悪くなった。

「あの女か・・・。」

「（怖いっす、雪那さん！ むっちゃ負のオーラを感じます！）」

その時、昼休みの終了を告げる鐘が鳴らなかつたら、恐怖で気絶していたかもしれない、と悠里はのちに語った。

「馬鹿と絵美との馴れ初めはこんな感じだな。このあと普通に戦って、ボコボコにして、班を組んだわけだが。未だにあの時雪那がキレていた理由がわからない。」

「あ、こんにちわ。どうも、すめいあき皇無病です。」

「次紹介するのはこいつとの馴れ初めだな。時期はだいたい、中学三年の夏。ようやく《天衣無縫》の使い方っていうか能力みたいなのが分かってきた頃の話だ。この時期になると《天聖靈姫》も片鱗が見え始めていたんだ。」

「・・・え？　ちよつと待って悠里、私と会った時の話するつもり？」

「そうだが？」

「やめて！！　お願いだから！！　あれが私のなかでどれだけ重い歴史になつてゐるかわかつてるの！！　全人類の中でも一、二を争う黒歴史だから！！」

「では、次回は中二病を発症していた無病さんのおはなしです。」

「ヤーーーーメーーーーテーーーー！！」

彼女の切実な願いは、青い青い空に消えていった。

第九話的な何か。

三年後の視点から振り返った思い出（後書き）

・・・・・・・・グダグダな匂いがします。

見捨てないでください。ご感想をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6916y/>

白き鬼神と蒼穹の引き手(仮)

2012年1月14日21時47分発行